

震災に際して 会員の皆様へ*

(社)日本水環境学会・会長 藤江 幸一**

このたびの東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）では多くの方々が犠牲とられました。衷心より哀悼の意を表し、ご冥福をお祈りします。被災された方々には、心からお見舞いを申しあげるとともに、一刻も早い復興をお祈りします。

東日本大震災の発生にともない、本会では第45回年会について、会場における研究発表を中止し講演集による紙上発表のみとさせていただきます。3月18日から20日までの3日間にわたり北海道大学で開催を予定していた年会研究発表会は、実行委員長の船水尚行先生をはじめ、北海道支部を中心とした実行委員会のご尽力によって、会場の確保、講演集の印刷をはじめ、滞りなくその準備を進めていただいております。しかし、地震・津波による甚大な被害に加えて、東京電力福島原子力発電所における放射能漏出や建屋の大きな損壊をとまらぬ水素爆発が報じられるに至って、研究発表会の中止を余儀なくされました。予定されていた皆様には大変なご迷惑をお掛けしましたことを心よりお詫び申し上げます。加えて、従来の年会優秀発表賞は「年会優秀発表特別賞（クリタ特別賞）」と、年会学生ポスター発表賞は「年会学生発表特別賞（ライオン特別賞）」と、今年度に限りそれぞれ名称を変更して、紙上審査により授賞者を決定させていただくことにしました。この件についても、両賞にお申し込みいただいた皆様のご期待に沿うことができなかったことをお詫びします。

さて、このたびの震災は、情報発信、基準のあり方、モニタリングや迅速な状況判断、そして平常時からのリスク管理に加えて、非常時の危機管理について多くの課題を浮き彫りにしました。とくに福島原発の事故は、これらの点について、苦すぎる経験と多くの教訓を残すことになろうと思います。

自然災害は生命や財産を脅かすにとどまらず、大きな環境破壊をもたらします。東日本大震災では、地震と津波によって多数の下水処理場の被災が伝えられており、下水処理機能の喪失や多様な汚染物質の流出によって水質汚濁が進行しているものと思われます。水

質汚濁による被害を食い止めるには、どのような対策が効果的なのか、現状をいち早く把握した上での具体的提案が求められているはずですが、環境研究の成果は実際に環境解析や評価、環境保全や新たな環境の創成に役立つものであり、とくに環境破壊が著しい非常時にこそ、それが活用されるべきであろうと考えます。

福島原発に関する報道では様々な基準や単位が登場しています。乳児を対象とした摂取基準を超える放射性物質が水道水から検出され、ペットボトル入りの水が瞬く間にスーパーの店頭から消えました。ひとたび設定された基準は一人歩きし、少しでも基準を越えると直ちに生命に危険があるかのような扱われ方をします。基準設定の背景や経緯、根拠となったデータの集積・保存に加えて、リスクについての理解を深めることが必要でしょう。毒性や有害性を強調する研究のみならず、基準の意味を明確にし、リスク評価をより確実なものにするための研究や現場での不断のモニタリングによる情報の集積が求められており、そのような地道な研究が一層支援されるべきであると考えます。

ご案内のとおり、今秋には10月2日～6日の間、東京国際フォーラムを会場としてASPIRE2011が開催されます。すでに1,000件を超える研究発表や多くのサイド・イベントが予定されています。地震・津波の惨状に加えて、原子力発電所建屋爆発の映像が海外でも繰り返し放映されています。政府による情報発信の遅れや拙さも加わって、今後も来日を躊躇するような事態が継続することは否定できません。状況の改善や適切な情報発信によって、海外から多くの研究者にご参加いただき、震災にとまらぬ環境問題を含めて活発な議論ができることを切望しています。

3月11日14時46分以降、我々は多くの未知の体験をしています。直接、間接に震災の被害を被った会員の方も多いことと思います。未だ原発事故による危機の終息も不透明な状況です。もう一度、犠牲とられた皆様に哀悼の意をささげ、被災された方々にお見舞いを申しあげるとともに、会員の皆様のご健勝を祈念してご報告、ご挨拶とさせていただきます。

* Dear JSWE Members, Upon the Unprecedented Disasters

** Koichi Fujie, 横浜国立大学大学院教授